

〔心田詩稿〕八月初吉詩 井序

本邦風俗名仲秋朔旦爲憑日、以資相贈、贈則有答、以故無貴也、无賤也、習以爲常、不亦宜乎、余結交足下非一日之雅、然則於是辰盍獻以小詩乎、所庶幾者酬答如嚮、所謂投以木瓜、醉以瓊瑤者乎、中秋初吉日、憑寄小詩篇、未情飛奴繫、好教黃耳傳、蕭朱无頼甚、管鮑有終焉、猶記昨宵面、夢回鏡度前、

八月十五夜

九月十三夜併入

八月十五夜ノ月ヲ賞スルコトハ、支那人ニ倣ヒシモノニテ、寛平延喜ノ頃ヨリ、之ヲ以テ高興ト爲シ、宴ヲ設ケ詩歌ヲ賦スルコト、漸ク盛ニシテ、後世ニ至ルマテ衰ベズ、而シテ民間ニテハ、芋團子等ヲ月ニ供シ、又互ニ贈遺スルヲ以テ例トス、

九月十三夜ノ月ヲ賞スルコトハ、醍醐天皇ノ時ヨリ起リ、爾後八月十五夜ト相對シ、並ニ此夜ヲ稱シ、以テ明月ノ夜トス、

名稱

〔書言字考節用集二時候〕月見 八月望夜 名月

〔倭訓栞前編十六〕つきみ 中秋十五夜は秋の最中なれば、至て清明なるをもて、倭漢ともに賞し來れり、

〔月令廣義八月十五〕十五日、中秋節 秋九十日、是日爲中秋、是夕月中、三五夕、三五十五、

〔日本歲時記八月十五〕十五日、中秋といふ、秋九十日の最中なる故なり、略中、今宵は秋の最中にて、殊に月を賞する故に、月夕とも、三五夕ともいふ、歌人騷客の晴を期する夕なり、林羅山野槌にいはいく、今夜月を玩ぶ事、大かた李唐の世より盛にして、詩人文人其詠おほしといへども、古樂府に嫦娥怨の曲あり、漢人の中秋の月なきによりて、此曲を作るとある時は、漢の世よりもある事にや、又